

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	帽章と白線（補遺；2）
Author(s)	第五高等學校開校五十年記念會
Citation	五高五十年史：454-456
Issue date	1939-03-03
Type	Book
URL	http://hdl.handle.net/2298/10804
Right	第五高等学校（熊本大学）

熊の各宮殿下

は秩父宮・同妃兩殿下、昭和六年七月三十日には閑院若宮殿下、昭和七年二月二日には李王殿下、同年十月三日には北白川宮永久王殿下、昭和八年四月一日には久邇宮朝融王殿下、同月八日には梨本元帥宮殿下、同月十日には高松宮妃殿下、昭和九年四月七日には東伏見宮妃殿下、同年五月三十一日には伏見宮博恭王殿下、昭和十年十一月七日には朝香宮孚彦王殿下があり、御動靜の御都合に依り、奉送迎を御遠慮申上げたものと察せられる。

二 帽章と白線

本校と第一高等學校との關係

全國の高等學校中、その沿革の最も古いものは、第一・第三の二高等學校であることは、周知の事實である。中に就いて一高は、大學豫備門時代から數へると、前記の校則に徴しても、文字通りに第一たる資格があることも喋々を要しない。而して明治十九年に創設せられた五高等中學校の帽章が、その形式に於て相通するものがあるのは、第一と第五とのそれである。それには何か理由がなければならぬ。

本校設立當時に於て、形式内容ともにその標準となつたのが、第一高等中學校であつたことも既に述べたが、殊に、野村校長が一高の校長であつたことが、その最も深い因縁となつたことも察せられるであらう。これ則ち他の凡ての事が、細大となく相談の結果に成れるに反して、圓に五中の文字を入れることは別として、柏葉と橄欖葉とを組合せることは、殆ど先決的のものであつた所以ではあるまいか。然り而して創立當初は、帽章が何を意味するか就いて熟知せられてゐた筈なのに、時と共に忘れられて了つたものと見えて、大正三年になつて、本校から第一高等學校宛、その由來を照會した回答が來てゐる。

帽章に關する一高の回答

本月四日付ヲ以テ生徒帽章之儀ニ付御照會之趣了承右ハ當校ニ於テモ柏葉及橄欖葉ノ帽章ヲ相用ヒ居リ候而

シテ右兩葉ヲ採擇セシ意味ハ別紙之通りニ候間御了知相成度此段及御回答候也

大正三年十二月十四日

第一高等學校庶務掛印

橄欖ハミネーヴァノ神ノ象徵ニシテ智(文)ヲアラハシ柏ハマルスノ神ノ象徵ニシテ勇(武)ヲアラハセル

モノ

要スルニ文武ヲ象レルモノ

而して「綠も深き柏葉の……橄欖の花雫すよ」云々の一高の寮歌は、一と頃感激を以て一般に歌はれ、天下を

風靡するの概があつたことも、中年以上の人々の知る所であらう。

然るに、明治二十七年九月十一日の揭示には、

生徒

帽章及び
鉦の改正

今般本校帽章及鉦ヲ改正ス

但從來ノ生徒ハ當分ノ内從來ノ鉦ヲ其儘用ユルコトハ苦カラズト雖モ帽章ハ速カニ更正スベシ

とあるのは、本校が、同年を以て第五高等學校と改稱せられた爲、圓の文字を五高に改めたことが察せられる。而して現今各高等學校の帽章に文字を入れてゐるのは、蓋し本校のみであらうと思ふ。

白線は、恐らく全國高等學校共通となつてゐると思ふが、本校現在の白線三條に就いては、本科・豫科・補充科と分れてゐた頃は、本科は三條、豫科は二條、補充科は一條と區別されてゐたものが、補充科がなくなり、本科と豫科とは合して大學豫科となつては、條數に區別を設ける謂はれなくなり、遂に今日の三條だけとなつた

白線の一
條・二條・
三條の改

ものである。窓目からかも知れないが、角幅は別として、丸幅に於ける白線二條乃至三條は、何と言つても、全國の學校に於ては、最も特徴があり、又最も品格があるやうに思ふ。

三 修學旅行より野外演習まで

旅行規程
の改正

二十三年
の旅行

修學旅行に就いては前にも述べたが、多少の缺行者を除いては、校長以下職員生徒全校的行事として、更に一言して置きたい。その方法も色々と變つて、大正十二年を最後として、その跡を絶つて了つた。先づ規則に現れてゐるものから記せば、明治三十二年十一月に改正された生徒修學旅行規程十三條がある。その第一條に依れば、「修學旅行ハ軍隊組織トス」とあり、(工學部は別に定められてゐる)第二條には、「修學旅行ハ三泊以内トス」と定められてゐるのは、或は一週間、或は十日間、或は二週間に互つて行はれたもので、龍南會雜誌に詳細に記されてゐる。例へば、二十三年十一月六日より、十日間の豫定を以て、福岡地方へ出發せる時の如き、生徒百六十人、職員には軍隊・歴史・地理物産・測地・博物・圖畫・氣象・建築・古文書類・地質礦物・製造工業・旅行紀事・先發・衛生・會計・輻重等の擔當を定め、玉石郡長新美吉孝氏より、鶏卵四百箇、小魚二百尾の贈物があつたのを始として、各地に於て非常な歡待を受けたことは、歸校後學校から出した禮狀を見ても知られる。即ち官報へ報告したものには、

第五高等中學校ニ於テハ學術研究ヲ兼ネ軍隊ノ風紀ヲ實地ニ習學セシムル爲メ生徒百六十人ヲ軍隊ニ編成シ職員之ヲ率ヒ久留米福岡三池地方ニ向ヒ長途ノ行軍ヲナセリ即チ十一月六日熊本ヲ發シ植木ニ泊ス七日川邊村大字鍋田ニ泊ス該村ハ國道筋ニ非サルモ第六師團機動演習觀覽ノ都合ニ據レリ八日黎明川邊村ヲ發シ兼松驛ニ

泊ス九日久留米尋常中學明善校ヲ參觀シ同市ヨリ鐵路ニ據リ博多ニ出テ元寇紀念碑建設所ヲ覽福岡市ニ泊ス十日宮崎神社ニ參拜シ社前ニ於テ軍隊捧銃式ヲ行ヒ寶物ヲ拜觀シ福岡縣立尋常中學修猷館及尋常師範學校其他工業場等ヲ參觀シ福岡市ニ滞在ス十一日鐵路ニ據リ太宰府神社ニ參拜シ社前ニ於テ捧銃式ヲ行ヒ寶物ヲ拜觀シ各所ノ古蹟ヲ訪ヒ二日市ヨリ再ヒ鐵路久留米ニ到ル十二日柳川ニ達シ直チニ柳川尋常中學橋蔭學館ヲ參觀シ同所ニ泊ス十三日三池炭礦及紡績會社ヲ縱覽シ大牟田ニ泊ス十四日三池炭礦會社ノドックヲ縱覽シ府本ヲ經金山ニ於テ發火演習ヲ施行シ高瀬ニ泊ス十五日吉次越ノ間道ヲ取り歸校セリ此行沿道各所ニ於テ地理歴史其他學術上ニ就キ説明スヘキモノアレハ教員必ス生徒ニ教示シ植物ヲ採拾シ山水物件ヲ描寫スル等修學上得ル所尠カラサルノミナラス生徒皆活潑壯健ニシテ歩行ニ艱ムモノ少ク中途病ニ罹リ歸校セシ者ハ僅ニ二名ナリ且ツ此行至ル處學校會社及人民ヨリ厚遇ヲ受ケタルハ一行ノ大ニ感シタルトコロナリと記してある。而して、何かの參考の爲に、「修學旅行決算」を左に掲げて置きたい。

修學旅行
費決算

修學旅行旅費決算

一金四圓	旅費八泊分	一金五十錢	一泊分追給高	計四圓五十錢也	預り高内仕拂分	金一圓五十六錢也
九泊宿料	汽車賃等					

内 譯

金十錢植木宿泊料	金十一錢鍋田村同	金十一錢五厘兼松同	金二十三錢久留米博多間汽車賃	金十錢博多
二日市間同	金十四錢二日市久留間同	金二十四錢福岡市宿泊料二泊分	金十三錢久留米一泊同	金十二錢